

ット図が区切り区切りに配置されている。

(原田 康夫)

〔私家版、広島県廿日市市本町五―十八、平成十四年八月二十日、B六判、一六八頁、非売品〕

青木 正和 著

### 『結核の歴史』

この著作を読んで今さらながら思ったことは、疾病史は自然史ではなく社会史であるということである。また当然のことながら、疾病史は医学史と切り離して考えることができない。医学の歴史は疾病を認識し、これを発見し、それに働きかけて変容させ、変容させたものにまた働きかけ、終りがないようにすら見える。

この本の副題が「日本社会との関わり、その過去、現在、未来」となっているのもまた当然である。世界には膨大な結核の歴史に関する文献があるが、本書は日本の結核の歴史を中心として書かれている。わが国では結核の歴史に関する本はあまり多くなく、その意味からいっても貴重な本である。

著者は一九五三年に東京大学医学部を卒業し、その後一貫して結核診療の道を歩み、その五十年の苦闘の跡を踏まえて書いたこの本は重みがある。

結核病の歴史は古く、近年の考古病理学の成績によれば、

紀元前数千年のミイラや骨などの遺物にその痕跡が認められるという。文献的記載では、紀元前七世紀のメソポタミアのアッシリアの粘土板文書で肺結核と思われる記載がある。また紀元前五世紀頃のギリシャのヒポクラテスは結核を *phthisis* という病名で、四二例の病歴を述べ、そのうち二五例が死亡したという。

*phthisis* は消耗病という意味である。これに対する英語は *consumption*、ドイツ語は *Schwindsucht* と呼ばれ、中国及び日本で労働などと呼ばれたのも同じ意味である。肺の病変に注目すれば *phthisis pulmonis* と呼ばれ、中国及び日本の肺病、労咳などはこれに相応する。またこの病気の伝染性は中国で古くから認識され、伝屍労とも呼ばれた。平安時代にわが国で中国医学を紹介した『医心方』は編纂書であるが、伝屍労も載っている。

わが国での結核病の歴史として、著者は最近の考古学の成果により、西暦紀元前後の弥生時代から五、六世紀の古墳時代の人骨にカリエスが認められるので、この頃大陸からの多くの渡来人とともにこの病気ももたらされたのだろうと推測している。

また日本の文献記録時代に入ると、著者は先輩の岩崎龍郎氏の説として、『日本書記』に記載される天武天皇の晩年の体調不良の経過から「結核の疑いあり」ということを紹介しているが、これは論拠が薄弱と思われる。

平安時代の清少納言の『枕草子』に「胸の病」というのが

簡單ながら二条にわたって述べられているのは注目される。

また時代が下り江戸時代になると都市化も始まり、結核が増加したというのは首肯できるが、当時の資料を引用するのに結核という言葉が混用して述べるのは疑問であり、資料に使われている通りの肺労とか労咳とかいう言葉を使って述べるべきと思われる。

この結核という言葉であるが、フランスのラエネックやイスのシェーンラインの仕事により、肺における結節形成の病理的な重要性が認識され、*tuberculosis* という病名が作られた。これにわが国で最初に結核という訳語をあてたのは幕末の緒方洪庵であろうということは評者が指摘した。

明治の初期から結核という言葉は定着したが、ヨーロッパでもこの病名が真に一つの感染症として認識されるのは一八八二年（明治一五年）のロベルト・コッホによる結核菌の発見を待たねばならなかった。これから近代の結核病学が始まる。

しかし病原菌が発見されてもこの病気の伝染と発病の過程はすぐにはわからず、診断、治療、予防の方法もなく、産業革命下のヨーロッパでも患者は増加の一途を辿った。コッホ創製のツベルクリンは最初治療薬として期待されたが、後に診断用薬となった。

わが国では官製の産業革命を企図し、まず線維産業が勃興したことによって女子労働者に結核が蔓延し、さらに軍国主義時代になると、重工業の興隆と兵役により若い男性に急速

に結核が広がったと著者は指摘している。

診断面からいえば、レントゲンがX線を発見したのは一八九五年（明治二八年）であるが、当初はあまり実用性がなく、わが国で間接撮影法が考案されて、徴兵検査や国民の健康診断に役立てられたのはやと昭和一五年からであるという。

BCGがフランスからわが国にもたらされたのは大正一四年であるが、それによる予防接種が開始されたのは昭和一七年である。

治療薬として画期的なストレプトマイシンは一九四四年（昭和一九年）に発見された。

わが国では戦後の昭和二六年に「結核予防法」を制定し、それ以後結核対策が本格化するのであるが、それは著者が最も力を入れて書いている所であり、本書を読んで頂かねばならないだろう。

（中村 昭）

〔講談社、東京都文京区音羽二一―二二―二一、電話〇三―五三九一―三六二五、平成十五年二月五日、B六判、二七九頁、二二〇〇円〕

山田 慶兒 著

『氣の自然像』

中国を中心として朝鮮半島、ベトナム、琉球、日本などに